

「春キャベツの実験 (4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

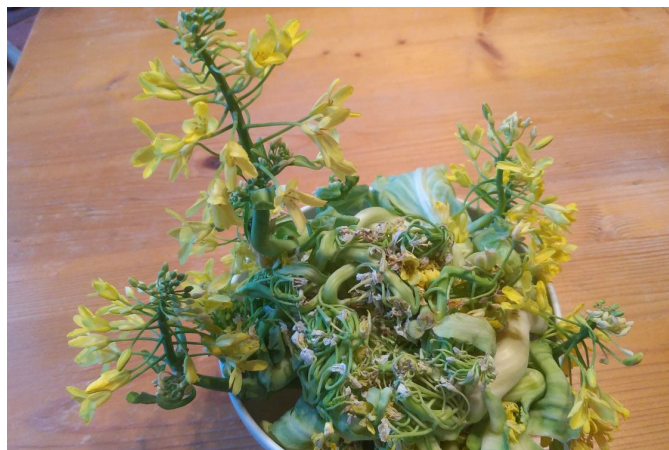
キャベツの花の教材研究も、なかなか面白い。教材としては価格が低いし、これなら休校中の家庭でも簡単に実験ができる。



「究極の訳ありキャベツ」の中心部だけを取り出すと、このようになっている。可食部の「葉」はほとんど見当たらず、複雑にからまった茎と花のつぼみばかりだ。キャベツの花は、結球葉が開いたあとにいちはやく「臺(とう)」を立てて、高い位置に開花できるように、複雑に茎を折り曲げて、念入りに準備していたのである。「びっくり箱」ならぬ「びっくりキャベツ」とでも言っておこう。



一番中心の茎(芯)を縦に切ってみた。野菜包丁の刃がなかなかたたないほど固い。中心の茎自身も「つ」の字型に折れ曲がっている。その芯から何本も茎が出て、それぞれの枝の先に、たくさんの花のつぼみが用意されている、という構造とわかった。



「小さくて」「軽くて」「安い」「訳ありキャベツ」を、少しだけ葉をむいて、そのまま水栽培すると、数日でこうなる。これは学校でも家庭でも簡単にできる実験だ。野菜の水栽培は、ニンジンやタマネギでもできるが、キャベツはダントツで変わっている。



「全球キャベツ」でなくても「4分の1カットキャベツ」でもご覧の通りの成長ぶり。水を入れる容器は重いもののほうが良い。これは「峠の釜めし」の容器を使っている。



葉がなくても、茎(花穂)だけでも花は咲く。これなら、家庭でコップやR-1の容器で実験できる。休校中の実験として、なかなか面白そうだ。